2024 年 3 月

高等教育コンソーシアム信州　大学間連携事業「信州若者会議」

汎濫停蓄の場づくり～4 年間の取組みと展望

高等教育コンソーシアム信州　推進チーム
信州大学キャリア教育・サポートセンター
講師　勝亦達夫

１．高等教育コンソーシアム信州と大学間連携事業

長野県下の高等教育機関（大学・短大・専門学校）では、それぞれの特性を活かし、これまでも研究・教育をはじめとして地域との連携による様々な取り組みを進めてまいりました。それらを一層発展させるため、『高等教育コンソーシアム信州』を平成 20 年より設立しました。このコンソーシアムは、加盟校の個性を活かしながら、協力関係の中で教育研究資源を有効活用し、学生教育の成果と教育研究の還元とにより、県と地域の発展に貢献することを目指しています。

コンソーシアム信州では、大学間 ICT ネットワーク講義システムを整備し授業を配信したり、単位互換により相互の特徴的な授業を受講したりするなどの連携活動を行っています。その中で、学生支援事業の一つとして、「県内大学連携事業」を実施しています。連携事業を通じて県内大学の学生が交流し、普段自身のキャンパスだけではできないような、長野県をフィールドとした一緒に学ぶ機会を企画してきました。

２．信州若者会議の開催

2019 年より、コンソーシアム加盟校での学びや人材育成の機会と、特色ある地域企業の取り組みを繋ぎ、長野県をフィールドとして、企業の方々との対話を通じて、信州で「働き、暮らす」魅力をさまざまな視点から共有する「若者会議」を企画・開催してきました。

“若者会議”は、2012 年に長野県小布施町から始まった交流のまちづくりのムーヴメントです。今回は、地域団体や企業と具体的な課題について話す「場」を体験することで、より地域に関わることを意識して対話する機会を設定します。地域課題を考えることから「暮らす」ことに注目し、「信州の地域に若者が関わる『流れ』をつくる」ことが目標です。

信州若者会議は、この新たな仕組みの構築のため、地域課題を扱う対象地域（会場）を信州全体に設定し、会議をきっかけとして地域理解を深め、地域の魅力的な人材との対話を通じて、課題に自ら取り組む力を養います。また、若者会議は、これまで関りがなかった魅力的な信州の各地域と、より強い「繋がり」を育み、地方創生を推進する人材基盤やネットワークが構築されることを期待し開催してきました。方法としては、企業や地域自治体・団体とのさまざまな「対話の場」をつくることで、県内学生の定着を目指す。信州で「働く」ことに加え「暮らす」視点で、地域や企業の課題について話をする、考えることで、継続的に関わりたいという意識を醸成するものです。

小布施若者会議の様子（2012 年）

背景、課題意識としては、長野県における人口・産業人材の課題（背景）がありました。日本の各地方と同様、長野県の若年層人口（10～20 代）の転出超過 20 歳～24 歳の流出は多く、卒業時に県外へ出て就職をする傾向が続いており、他の地方大学、地方都市と同様、卒業時の県内就職による若者の定着促進が課題でした。ただ、県内外から県内へ進学し学んだ学生は、地域での経験の多寡によって定着に一定の効果があり、高等教育の機関に、良い経験、魅力的な人と出会い、課題と向き合う楽しさや、やり遂げられる場所や心地よい居場所や地域と出会うことが大事で、キャリア選択、定着には、①在学時に地域の魅力を「知る」ことができているか、②在学中に就職先である企業を知る機会があるかの２つに要因にあるのではと仮説を立てました。そこで、キャリア教育支援の一つとして、早い段階で「知る」機会を設け、様々なキャリアや社会人を見て、自身の将来を具体化するために、企業や地域の方々とより深く話をすることで、その地域や企業を知り、理解できるのではないかと考え、信州若者会議を試行錯誤しながら実施してきました。

3. これまでの信州若者会議の取り組み

3－1. 松本若者会議 2020

初年度である 2020 年度は、松本市で開催しました。35 歳以下の若者を対象に若者会議実行委員を集め、松本市の町歩きをして地域を知ることからはじめ、企業課題を考えてみるワークショップをしながら、課題解決をどうやるのか、自分たちで試行錯誤しながら、本会議の組み立てをしていきました。

2 月に開催した本会議には、最初にキーノートスピーチとして、若者会議発祥の小布施町前町長 市村良三さんと、開催地である松本市の臥雲義尚市長をお迎えし、お二人のまちづくりにかける想い、若者への期待をお話しいただきました。

共通していたのは、「今をもう一度捉えなおすこと」。

それは、見る視点、多様性や歴史をもう一度見直すこと。新しいものを創り出すために、現在を自分自身の目で捉えることの重要性をお話しいただきました。

そしてもう一つは、「繋がること」。

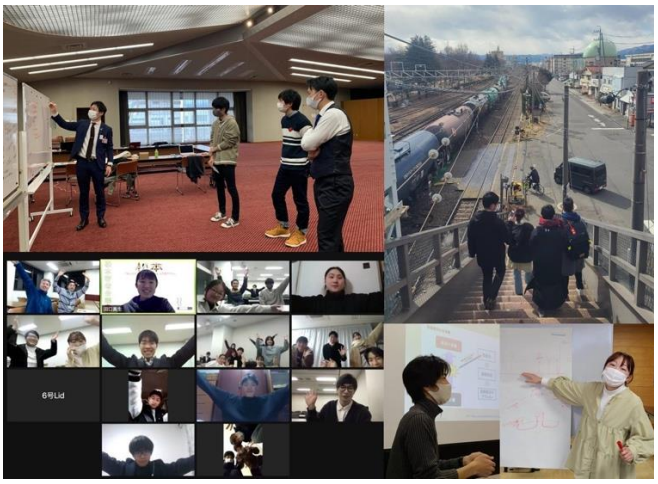
1 人ではできないからこそ、仲間や組織、地域とつながる大事さでした。今はオンラインというツールもあり大変便利になりました。だからこそ、 相対すること、現場できることの価値はますます重要になっている。

御二人とも、本当に真剣に、まだまだ未熟な次世代の若者達に熱を込めて お話しいただきました。これが、起源となり、その後各地の信州若者会議に展開していくこととなりました。

本会議では、事前に設定された松本市に関連する８つの地域/企業課題を解決するアクションプランを検討する３日構成のプログラムを実施しました。

	テーマ	参画企業（自治体）	会場	中間報告会
学びあい	体験で引き出す学びの好奇心！ ～未来の子どもに大切な学びは何だろう～	N.C.C-style	青少年ホーム	青少年ホーム
健康	もっくトーク ～「心地よい」って何？？～	JT（日本たばこ産業株式会 社）	Mウイング３－B会議室	Mウイング3-2
交通	自転車で信大生活に革命を起こす！？	松本市	Mウイング6階ホール	オンライン
環境	信州まるっと！プラスチック円卓会議	松本市環境政策課	Mウイング6階ホワイエ	Mウイング3-2
福祉	Sport is universal language ～障がいという壁を乗り越えるには？～	長野県パラ陸上競技大会 日本パラリンピック サポートセンター	青少年ホーム	青少年ホーム
情報	わかしら ～アンケートから見る若者の生態～	松本市市民課	Mウイング6階ホール	Mウイング3-2
企業課題（1）	地域密着型地方銀行と考え る！ ローカルイノベーシ ョン	株式会社 長野銀行	長野銀行会議室	Mウイング3-2
企業課題（2）	市民で進めるスマートシ ティ 新ライフライン通信 の行方	株式会社ドコモ CS 長野支店	青少年ホーム	青少年ホーム

第１回　松本若者会議の町じゅう会議場の企画



充実した議論や企業の皆さんとの対話もでき、いくつかのプロジェクトを実施していこうという流れも生まれ充実した会議が開催できました。しかしこの時、世界的なコロナ感染症が拡大する直前で、全日程ともオンライン併催で配信・参加を受け付けていました。

3-2. コロナ禍における信州若者会議(2021 年)

2020 年に発生した COVID-19 は、大学生活、地域での活動に大きな変化と制約を及ぼしました。そこで求められたのが、「今までを捉え直し、自分で地域や社会の未来を描くことでした」。集合知と実践知をもって現在の状況を乗り越えていこうと、2 年目となる 2021 年の若者会議では、『居場所』『環境・教育』『食』をテーマに設定しました。奇しくも、コロナ禍で大きな影響を受けたこれらのテーマにおいて、地域が抱えている課題をローカル（現場）で共有し、地域の資源価値の再定義、持続可能な資源活用の在り方を主体的に考えるために、開催地域を松本、伊那・長野、白馬の 3 地域に拡大をしました。

しかし、実際は感染拡大防止のために活動制限で何度となく中止や見直しとなりました。せっかく交流しても、お互いに顔が見えないまま活動しているようなことも多かったですが、そんな中でも学生同士が対話し、企業の課題を聞き、自分たちでできること、やりたいことは何を考える姿が見えたことが、何よりも希望でした。

松本若者会議「居場所」	伊那若者会議「食」	白馬若者会議「環境・教育」
松本若者会議2021 県内大学、民間事業者及び協力企業、行政（松本市、松本市青少年ホーム）とともに、に実践的な課題探求プログラムを通じて地域の魅力発見、人材育成を行う。 プログラムは、大学生が中心となり企画・運営し、大学生テーマ、企業テーマ、行政テーマを設定。地域の中高生も含めた地域課題解決のための会議をベースに、知る-分析する-行動案を作成するの3段階のディスカッション方式で進めていく。	**信州の食を考える若者会議～食で創る未来プロジェクト2021** この度、信州の若者が主体的に関り、信州のジビエや果物、その他の多様で豊かな食の資源を、たくさんの人に届け味わってもらえる商品やサービスを考えたいと思い、「信州の食でツクル未来プロジェクト」を立ち上げました。今回、「信州の食から探る地域課題」をテーマに、現状を共有しグループディスカッションで地域の食の課題解決を考える善光寺での合宿を企画しました。この合宿を通じて、「自分たちが関われる地域の食の課題」を設定し、アクションプランを考えます。	**白馬若者会議** **@しくみつくるcollege2021** 地球と世界の未来のための学びと実践の機会を目指します。インプットに始まり、これまでの在り方の変化について教えてもらい思考します。これから取り組んでいこうと思っていることの共有とジブンゴトとして今ココだからできることは？を考えて、簡単ではない解は一つではないことを考え続けます。世の中の複雑で難しい問題にチャレンジし解決策を考えみんなで取り組みます。
メンター サザンガク 山崎 孝一郎さん	メンター AmberLab 久保田飛鳥さん	メンター しくみ株式会社 石田幸央さん
11月27日 多事争論：若者アフタートーク 12月18日 企業見学会 （株）アスピア インプットと見学（午後） 12月19日 女鳥羽朝活プロジェクト 1月5、19日 実行委員会@サザンガク 1月 居場所会議@浅間温泉 3月11,12日 居場所についてテーマのディスカッション（本会議） 3月●日 発表会	12月2日 森についてのレクチャー（オンライン） 12月9日 ジビエ消費量についてのレクチャー（オンライン） 12月11日 長谷村クリスマスプロジェクト 流木でクリスマスツリーの飾りを作ろう@長谷村 12月27日 第1回実行委員会（オンライン） **2月26,27日** **信州の新たな食を考える「善光寺合宿」** 3月●日 発表会	11月19日 夕方 Meetup BBQ 11月20日 環境と難民のことを考える、システム思考講義＆ワークショップ 11月21日 16時まで Snowpeak Hakuba Landstationにてマルシェ出店 12月24-25日 ワークショップ 2月25-27日 白馬合宿 3月 発表会

3-3. 白馬若者会議の取り組みと展開（2021-22 年）

コロナ禍の影響を大きく受けた会議の一つに、白馬若者会議があります。非環境や観光を比較しながら知るには最適な地域でしたが、常事態宣言、活動自粛はもちろんですが、白馬村は国際リゾート地で、海外からも屈指の人気のエリアで人の往来ができず、当時は大変厳しい期間を過ごしました。21 年度は、コロナ禍ながら有志で実施し、ゼロカーボンを学ぼうということで、「スキー場はどのくらい CO2 を排出しているか？」という課題を体験するため、CO2 の重さを雪で表現し、子供たちと「雪クジラ」をつくる体験学習をおこないました。簡単なようで実は難しく、雪の単位堆積あたりの雪の重さから、くじらの容積を割り出し、スケールを決めて重機を動かすということを行いました（メンター：しくみ株式会社　石田氏)。

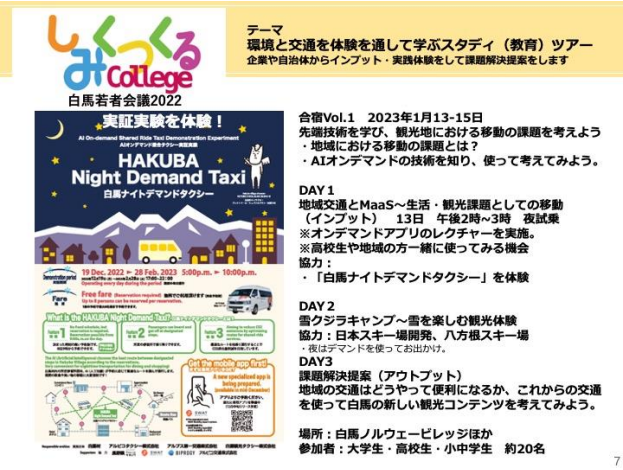
白馬村の重要な観光資源であるスキー場などは、一方で CO2 の排出など環境負荷も高いというのを学び、近年の温暖化により雪の量が減るなどの影響がでて、無関係の問題

ではないと考えています。現地でこうした知識を得ながらアクションに変えていくという実践を白馬では行なってきました。

2022 年度改めて課題を設定した際、環境を学び観光や課題となっていた地域の交通を考えるテーマを設定しました。2 年目として同じく環境から考えるこれからの観光の課題と題し実施しました（2023 年 2/18-20）。白馬村では、環境負荷の少ない観光資源を構築すべく、ゼロカーボンや循環型経済の仕組みを村内で検討していました。

そこで、移動における環境負荷の低減と、多くの地域の課題でもあった交通課題からこれからの観光施策に関わる会議を企画しました（1 月合宿:1/13-15）。

白馬村の持つ魅力（施設や場所）は、移動課題によって住民や観光客に届きにくくなっている現状がありました。それに対し白馬村では、AI を活用した次世代交通サービスの実証実験実施を行い、これを体験しながらプロジェク創出を図ることにしました。



スキー＆スノーシュー体験・意見交換会

白馬ナイトデマンドタクシーを体験。
事業者からのインプットを交え、利用者視点で感じる課題や解決策を検討。

ここでの交流をきっかけとして、現在白馬村では、市町村の地域課題をビジネスで解決する「おためし立地チャレンジナガノ」で、令和 3 年度に長野県が企業とのマッチングを支援し、事業化した白馬村プロジェクトとして夏と冬に継続的なデマンドバスの実証走行が行われています。

産官学によるプロジェクトに展開し、AI オンデマンド乗合タクシーによる観光交通の最適化を目指す事業です。CO^2 削減等の効果も見込まれるほか、福祉等他分野への応用も期待されています。

長野県プレスリリース：

https://www.pref.nagano.lg.jp/ritti-it/happyou/230630hakuba.html

この取り組みは、2023 年度の冬も継続し、信州大学として

関わっている取り組みではありますが、アルピコ交通㈱、SWAT Mobility Japan㈱、BIPROGY㈱、アルピコタクシー㈱　、アルプス第一交通㈱、白馬村観光タクシー㈱の共同研究事業の場として展開をしています。

https://response.jp/article/2023/03/08/368422.html

https://kyodonewsprwire.jp/release/202311303623

https://terasu.biprogy.com/article/challenge-hakuba/

https://l-pass.jp/news/1986/

４．若者会議が目指す姿

4-1. 大しごとーく in 信州 Advance

信州若者会議のコンセプト（構想）は当初、信州大学・長野大学・松本大学と長野県や県内経済団体とともに取り組んだ文部科学省の「知（地）の拠点大学による地方創生事業（COC+）において、企業との対話の場として企画した「大しごとーく in 信州」から展開しています。

2018 年から始まり、就職活動というフィルタの中で話をするのではなく、やりがいや地域の魅力、学生の“なぜ”に答えるようなトークをしながら、魅力的な企業と出会い理解を深めようという企画で、現在も続いています。

対話の機会として企画の効果を実感しながら一方で課題であったのが、せっかく若者と企業が知り合うことができても、次のステップがない。インターンシップなどの機会はあるが、課題やプロジェクトを通じてより地域や企業に関わる機会がほしいという要望もあり、ならば「若者がやりたいこと」と「企業や地域・自治体の課題」をマッチする次のステップのしごとーくを企画しようということで、「大しごとーく advance」という名称をつけていました。

大しごとーく in 信州 2018（第 1 回）の様子

今では、若者会議としての意図や方法、構想が定まってきたことを受けて、「信州若者会議」としました。

大しごとーく in 信州 Advance の構想（2021 年）

現在の課題解決型インターンシップや PBL（Project Based Learning）の内容を考えるような機会として企画が精緻化されていきました。

4-2. 地域メンターとの対話によるテーマ設定

次に課題となったのは、「学生のやりたいこと」と「企業や地域自治体が解決したいこと」があったとして、その間を繋ぎプログラムやプロジェクトに昇華するには、コーディネーターの人材や役割が必要で、時間や経験も必要なことから、企業側でもこの動きができる人は限られていました。そこで、２年目から、各地でメンターとなる人材を探し、企業と学生の間に立ち、プログラム・コーディネーションの役割をお願いしました。事業計画でも、「学生（若者）・企業・行政の視点から見える地域・社会課題をヒアリング（インプット）-分析（課題設定）-プロジェクト構築（アクションプラン）-実践-改善が出来る知識とマインドを習得すると同時に、実践経験を通じて、変化への対応力、問題解決力をもったリーダー人材、資源と資源、地域と若者を繋ぐマネジメント能力を備えた中核人材の育成を目指している」と示しています。しかし、課題を共有し、企画を学生が主体的に運営することで、連携体制の構築を目指していましたが、社会人でも難しいこの役割を担うことは難しいため、モデル的人材として、各地に展開していたコワーキングスペースやシェアオフィスを運営されている方で、企業や自治体の伴走支援を得意とする方にメンタ

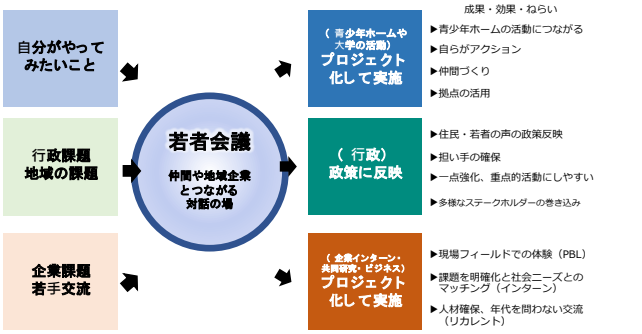
ー（自身が仕事やキャリアの手本となって、助言・指導をし、個人の成長や精神的なサポートすること）をお願いしました。

これらメンターの方々は、地域・企業と繋がりも強く、強みや資源を熟知し、課題もわかっていて、若者会議を展開するために欠かせない中核人材のモデルとなる方達です。

地域メンターと相談し、その地域だからこそ、実感する資源や課題をテーマとした若者会議が開催できるようになりました。

３回の若者会議を続ける中で、マッチングには学生の参加や動機によって３つのタイプがあることがわかってきました。①学生のやってみたいこと、②行政や地域の課題に関わってみたい、③若者の視点で企業の課題を解決して欲しい、若者の意見を聞きたい／話したいというものでした。

１．その後の展開を見ていくと、学生自身がマイプロジェクト化して、自らがアクションをしてみる課題。行政の政策・事業とリンクして若者が担い手となって実施していく課題。企業がビジネスや共同研究、インターンシッププログラムにして継続して取り組む課題というように、展開し



ていきました。

この「きっかけ」をつくるのが若者会議の場という流れができあがってきました。

５．2023 年度の若者会議（2022 年度からの継続・展開）

これまでの取り組みの中で、若者会議の基本的な流れができてきました。①地域コーディネーターを配置し、②定期的に戦略会議を開き企画をつくる。議論を継続的に深めることで、交流する機会やアクションを深める機会とする。各地の商工拠点や公共施設、コワーキングスペースと連携し、③その後のインターンシップや PBL に繋げる。そして、④一堂に会する報告・発表の機会をつくり、お互いの活動を発表して取り組みの共有や意見交換会を開催する。同じ流れも汲みながらも、実施活動やテーマ、アウトプットは様々なものでした。

信州若者会議2023

	松本若者会議 「トトノッテミソ」	小布施若者会議 「じぶん・しごと LAB」	辰野若者会議 「トビチ商店街2.0～商店街の新たな姿を体現する企画を立案せよ」	信州防災学 災害レジリエンス養成講座2023
担当	（一社）KOKO	（一社）小布施まちイノベーションHUB	（一社）○と編集室	日本笑顔プロジェクト
期間	10月～3月8日	1月12日、2月7日	3月19-21日	3月18日、30日
場所	松本市	長野市・小布施町	辰野町	小布施町
内容	2022年度実施した「企業と繋がるスキルアッププロジェクト」をベースに地元企業の魅力発信・発掘および地元学生の企業への理解を深める・個人のスキルアップを目的としたインターンシッププログラムを実施した。また、新規のプロジェクトの創出支援をするため、若者チャレンジサポートプログラムを実施した。 10月9日　若者会議キックオフ 10月18日　若者ミート・アップ 11月4日　中間発表会@観覧祭 12月11日　報告会 3月8日　報告会	この企画では、学生が自身の想いに向き合い、じぶんの想いからしごとを自身の力で作っていく力を養うことを目的に開催した。具体的には、学生にとっては自分に合った就職先や就職の仕方を見つける きっかけを作り出す。企業にとっては、学生との対話を通じて、企業の文化や価値観が共有され、企業の認知度が向上する。最終的には、じぶんの想いを起点にしごとをする学生や、充実感を持って働く企業の若手が増え、地域に人材が定着していくことを目指した。	「地域でやりたいことを形にしたい」「この地域で一歩踏み出したい」学生が、実際に実践しているローカル人材からインプットを受け、企画の立て方、書き方、実践の仕方を学び、自分のアクションプランを考えてみます。自分の考えを言語化する機会として本企画を活用してください。 現地でのフィールドワークを通してトビチ商店街の「今」を捉え、会話を通してリブランディングの全体の方向性を示した企画書を作成する。	信州防災学・災害レジリエント養成講座では、これまでに実際の災害現場に入って復旧ボランティアの活動してきた方を講師に迎え、現場で求められる知識や行動力、マインドを座学として学びます。次に、現場で必要となるチェーンソーの扱いや、がけ崩れによって閉ざされた土砂をどかす重機の技術など、いざという時に使える（かもしれない）実践スキルを、体験をしながら学びます。知識だけでは把握できない、現場で必要となる視点やマインドを体感する機会として本講座を開催します。
	情報・起業・観光	キャリア	観光・インフラ	環境・防災
企業	井上百貨店，松本市役所ほか	小布施牧場、システムアプリケーションほか	辰野町、やまとわ　ほか	日本笑顔プロジェクト

地域・企業とともに課題解決プログラム実施

第１回　地域・企業を知る、課題の提示
第２回　要因分析と課題の構造化（企画会議）
第３回　体験を通して実感（ワークショップ）
第４回　解決策（提案）とネクストアクションの議論
第５回　まとめと発表

5-1. 松本若者会議 2023 と松本市若者チャレンジ応援事業

2022 年度から 2023 年度にかけ、松本若者会議は、これまでの学生テーマを実施しながら、企業課題・テーマを継続的に行ないました。2022 年度に学生が企業インタンビューを行い、そこから課題や企業課題の根本（解決すべき要因）を探り、今年度その解決をするためにアクション（実践）をするというものです。

講座として、課題をもとに地域の情報を集め、発信できる

人材=編集者を育成する講座「企業と繋がるスキルアッププロジェクト」を実施しました。企業のインターンシップ情報を編集し、紹介するページを学生が取材して作る、という学生主体のプログラムであり、広報ページが完成に加え、学生自ら参加可能な企画づくりという二面の効果が生まれました。

アーカイブ：https://peatix.com/event/3434940/view

この取り組みに賛同いただいた株式会社井上様、信濃毎日新聞株式会社様にご協力いただき、実際に取材およびページ作成を実施しました。（メンター：株式会社ＸＹＺ　山崎氏、一般社団法人 KOKO　宮木氏）。

株式会社入江　井上（井上百貨店）

インタビュー型インターン記事

https://shindai-guide.com/navi/wakamonokaigi-interview-inoue/

信濃毎日新聞株式会社

インタビュー型インターン記事

https://shindai-guide.com/navi/wakamonokaigi-interview-shinmai/

そして、2023 年度はこの二年間の実績と経験をもとにインターンシッププログラム、若者チャレンジプログラムの 2 プログラムを実施内容に設定し、地元企業・地域・若者が連携し、新たな松本の文化を創っていくプラットフォームをつくっていくことを目指しました。この取り組みには、松本市市役所の新設された、地域まちづくり課ユースサポート係と松本市教育委員会青少年ホームも協働いただき、実施しました

トトノッテミソプロジェクト（2023 年度企画）

インターンシッププログラムでは、2022 年度実施した「企業と繋がるスキルアッププロジェクト」をベースに地元企業の魅力発信・発掘および地元学生の企業への理解を深める・個人のスキルアップを目的としたインターンシッププログラムを企画しました。

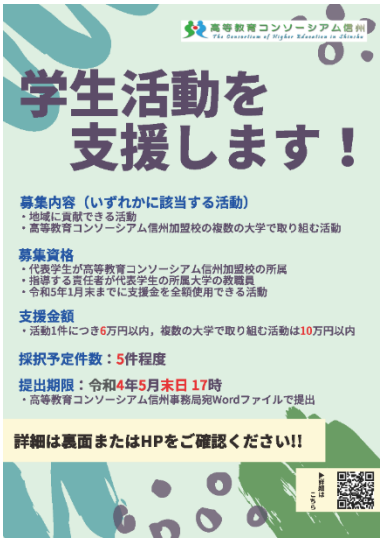
井上百貨店およびアイシティ 21 を運営している株式会社井上と地元サウナ施設 3 社(ゲストハウスしましま・タビシロサウナ・林檎の湯屋おぶ～)製作のオリジナルサウナ飯レトルト食品を題材に販路開拓、認知拡大を目的とした課題解決型インターンシップを実施しました。

導入として、製作に関わっているデザイナーやコピーライターの話、小売現場の見学を予定している。その後、実際にどのように販路および認知拡大していくかを 1 チーム 3～4 人を組んでもらい考え、また、実際にその施策が有効かどうかを検証するトライアルの場として、信毎メディアガーデン等での販売会を企画・実施しました。

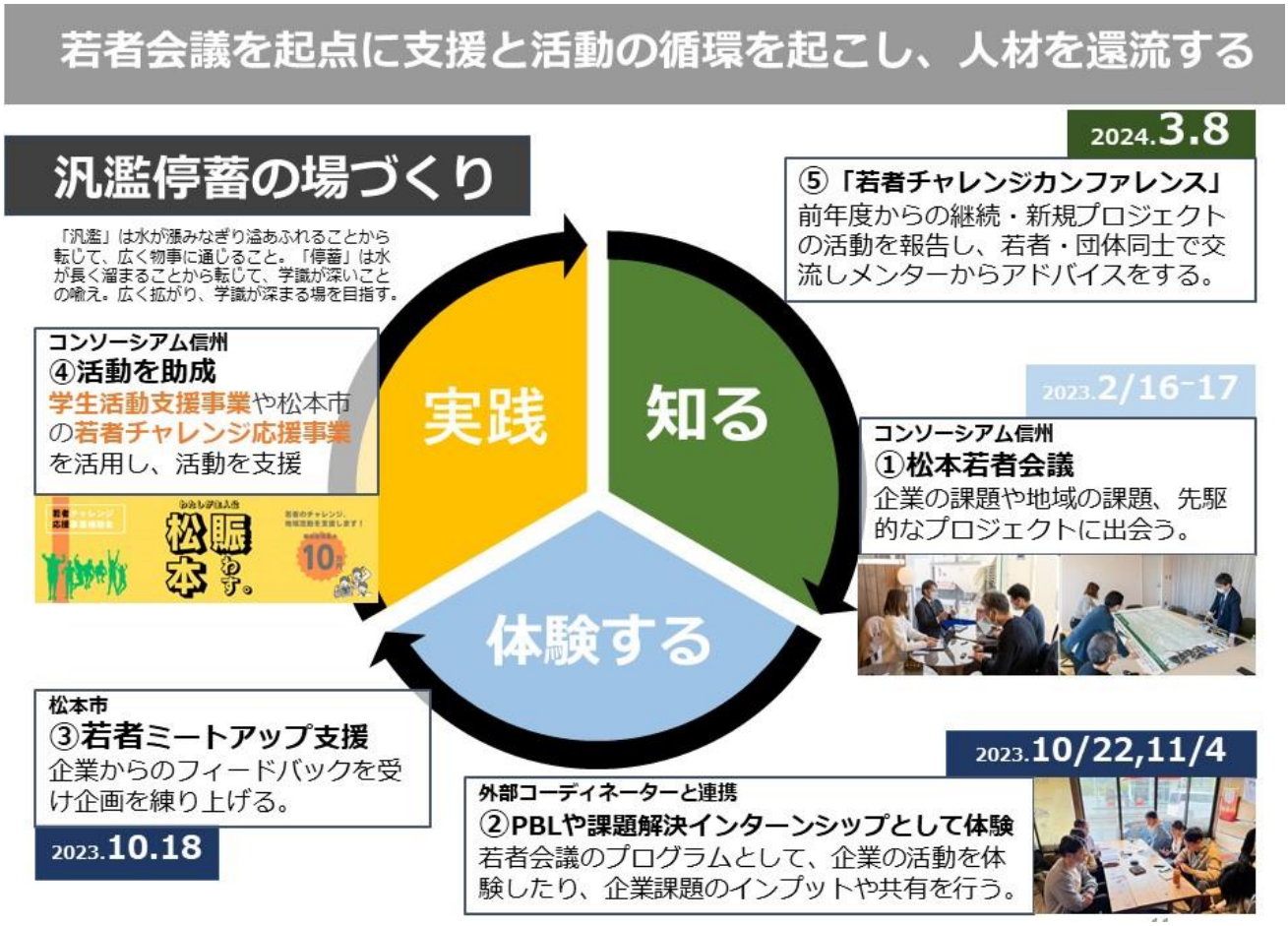
併せて、これまでの若者会議の流れを市独自予算としても展開し、政策として若者チャレンジサポートプログラムが2023 年度よりスタートしました。松本市地域づくり課ユースサポート係が主導となって、松本をもっと魅力的にするアイデアの実現や松本をもっと盛り上げる地域での活動を支援する「若者チャレンジ応援事業」を開始し、今年度は 8 件の事業が採択されました。採択された団体はもちろん、採択されなかった団体も若者ミートアップのイベントを通じ、企業や市役所のメンターのサポートのもと、他団体や社会人との交流を促し、マイプロジェクトに進化していくもので、若者会議のこれまでの理念を松本市として実現する形で展開しました。

このように、松本若者会議では、行政の若者支援施策との連繋が生まれ、市の若者支援の事業として引き続き、学生活動のサポートと企業や地域課題とのマッチングする仕組みが構築されました。継続して学生の活動が起きる、また魅力ある地域や企業として学生が興を持って関わるためにも、企業の取り組みや課題設定も大事ですが、支援する仕組みあることが大きいと感じています。

5-2. 学生活動支援・成果報告会との連動

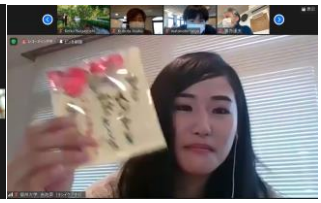


先の松本市のように、高等教育コンソーシアム信州でも学生活動を支援する「学生活動支援補助金」があります。域に貢献できる活動や高等教育コンソーシアム信州加盟校の複数の大学で取り組む活動等，学生が主体となって行う活動を支援し、1 件につき支援金額 6 万円、複数大学で実施する場合には 10 万円が補助されます。こうした支援も、信州若者会議で生まれたアイデアを形にする、次なる「有効なステップ」であり、各事業でやるのではなく、有機的に、あるいは情報的に繋げていくことで、益々活性化できると考えています。



この仕組みを活用したのは、伊那・長野若者会議から始まった、「信州の食でツクル未来プロジェクト（代表　信州大学　農学部　杉山和さん）」の活動でした。

信州の食に注目し、現代社会の食の課題を解決することを目的に活動を行うもので、2021 年度 2 月 26,27 日の「伊那・長野若者会議」において、「報われないりんごを救え！～間引き林檎のシンデレラストーリー～」をテーマに、摘果林檎の活用の議論を行ったことがきっかけでした。摘果林檎の活用方法を、企業・生産者（リンゴ農家）とともに議論を始めました。



美味しいリンゴを作るためには、一番育ちが良さそうな実を残して、間引くことによって一つの果実に栄養や糖分を集まるようにします。この際に間引かれ捨てられる林檎のことを摘果林檎と言いますが、ほとんどの摘果林檎は廃棄されてしまいます。この課題と資源に着目し、摘果林檎を用いた商品開発をして活用すると共に、より長野の林檎の良さや食品ロスの削減意識を広めていくことも目指しました。

活動を進めていくうえで活用したのが、高等教育コンソーシアム信州の学生活動支援事業でした。この活動補助金を活用し、学生は、摘果作業を体験しに行き、林檎農家さんの仕事についての理解を深め農業の課題について考える機会を持ち、また商品開発のために企業と一緒にアイデアを練り、摘果リンゴをパウダー状にして試作品をつくりました。その取り組みの披露の場として、信州大学農学部の学園祭において、摘果林檎パウダーを使ったクレープを販売しました。

これらの企業との対話や、活動を支える仕組みがあることで、学生の活動が展開していく機会となっています。

5-3. 2023 年度の新たな取り組み

本年度の新たな取り組みとして、新たに２つの地域として小布施町と辰野町が加わりました。

小布施じぶん・しごとラボ 2023

小布施町では、「じぶん・しごとラボ」と名付け、自身の想いに向き合い、じぶんの想いからしごとを自身の力で作っていく力を養うことを目的に開催しました。具体的には、学生にとっては自分に合った就職先や就職の仕方を見つけるきっかけを探し出し、企業は、学生との対話を通じて、企業の文化や価値観を共有し、学生にとっての企業の認知度（知っているからどういう企業かがわかる）を向上することで働くイメージの“解像度”を上げるというものです。最終的には、自信の想いを起点に仕事をする学生や、充実感を持って働く企業の若手が増え、地域に人材が定着する土壌・環境をつくることを目指しました。卒業後 3 年で離職する率が高い現在の社会の中で、「なぜ働くか。どうしてこの会社が良いか」を考える機会と思考を持つため企画として開催されました。

第 1 回 1 月 12 日　13:00～15:00　ワークショップの実施

会場： FEAT. space 大門（長野市）

学生の想いを引き出し、２回目の集客に繋げる。

生は名刺カードづくり WS を通じて自分を表現し、自分の想いに気づく

第 2 回　2 月 7 日　14:00～16:00

会場：小布施町役場　講堂

実際の働き手と対話することで想いを働くに繋げるヒン

トを得る。他者と対話し、自分に合った就職先や働き方をイメージします。学生が企業の存在を知り、企業の想いに触れ、認知度を向上させました。企業経営者にとっては、若手の想いに触れることで感じた事を企業活動に活かし、より良い企業経営につながる事も期待できます。学生が自分の想いを追求し、企業との対話を通じてオーナーシップを持った人材が増えることで企業が向上し地域社会にも良い影響を与えると考えました。

メンター：小布施まちイノベーション HUB　日高氏

辰野若者会議 2023「トビチ商店街 2.0～商店街の新たな姿を体現する企画を立案せよ」

長野県辰野町では、シャッター通りとなってしまった商商店を飛び飛びでも再び開け、トビチ商店街という新たな価値観で商店街をつくってきた。老舗も新店舗も閉じたままの店舗もひっくるめて、地域としての「楽しい」をつくろうとしてきました。これにより、少しずつ移住者が来て、新しいお店ができて、外から来た人が泊まれる場所もできました。流れができてきた今、飛び飛びの拠点・お店を繋ぐ「トビチ商店街２．0」を、今考える必要があると考え、今回、辰野町の課題を考える機会をきっかけとし、若者による新たなアクションを起こすことにしました。自分のやりたいことを見つけ、やりたいことを仕事につなげる学びと実践の機会を目指します。県内の大学生が、辰野が抱えている課題をローカル（現場）で共有し、地域の資源価値の再定義、持続可能な資源活用の在り方を主体的に考える場として実施しました。

内容は、「地域でやりたいことを形にしたい」「この地域で一歩踏み出したい」学生が、実際に実践しているローカル人材からインプットを受け、企画の立て方、書き方、実践の仕方を学び、自分のアクションプランを書いてみました。自分の考えを言語化する機会とし、現地でのフィールドワークを通してトビチ商店街の課題を捉え、リブランディングの全体の方向性を示した企画書を作成しました。

3/19（第０日）午後１時からまち歩きを行い、辰野駅～商店街～TOBOX（辰野町辰野 1704-1）までリノベーションされた店舗やアート会場として使われたスペース、現在進行中のプロジェクトを見学しました。

辰野町のインプットの時間には、一般社団法人〇と編集社 代表理事でコミュニティアーキテクトの**赤羽**孝太さんから、トビチ商店街のこれまでの取り組みから、企画の目的・目標、コンセプト、プロセスの中で何が課題でどう解決してきたのかを実践例をお話しいただきました。人口減少をマイナスでとらえるだけでなく、その状況の中で何ができるかといった、見方の変化も必要ということを示していただきました。

本会議１日目（3/20）の企画書の書き方講座＆アイデア提案作成では、特別講師として、トビチ商店がプロジェクトにも参画していた、PicoBirds 代表、LOCAL WRITE　主宰の磯木淳寛さんに講義をしていただきました。磯木さんは、千葉県いすみ市で、小商いの事業創出を支援し、中学生に「自由の教室」という主体的に考える教育プロジェクトを実践して磯木さんから、持続し循環する企画の在り方をお話していただきました。

午後には、一般社団法人〇と編集社、株式会社やまとわ取締役の奥田悠史さんより、企画書を書くために必要な、コ

ンセプト、５Ｗ２Ｈのノウハウを実践例とともに解説していただきまいた。自分がやりたいことを突き詰めると、地域のためになる企画になる実践例を伝えてもらいました。

これを踏まえ、2 日目（3/21）に企画提案の発表を行い、自分がやりたいコンセプトから、できることを企画書として形にしてみました。

辰野若者会議では、すでに動いている地域プロジェクトに対し、学生がやりたいと思ったことをインターンシップとして受け入れ、滞在場所、機会、人をマッチングしながら自分たちの事業にも繋げることを PBL として実践しています。地域の事情や課題をよく理解し、自分たちも企業として実現していきたいことを、学生の動きに合わせてコーディネーション、実践機会を提供しています。今回提案されたものも、次年度の夏のインターンシップのきっかけとなり、地域、企業、学生にとって良い循環になることが期待されています。

信州防災学・ 災害レジリエンス養成講座 2023

若者会議の新たな展開を目指し、県内大学生が共通のテーマで学べるような授業を構築していく、そのきっかけとしての若者会議を構想しました。信州において、どの大学においても共通のテーマ・課題となるようなものとして「防災・減災」があると考え、講座と実習を試行的に計画しました。

主旨としては、気候変動の影響による大雨や台風災害、また 1 月 1 日に起こった能登半島地震などの地震災害など、近年 100 年に一度といわれる激甚災害が、毎年のように起こっているような状況です。長野県でも令和元年の台風 19 号のよる水害や、諏訪・白馬など各地でがけ崩れや水害が頻繁に起きてしまっています。私たちは目の前の木が倒れて避難できなくなったらどうするか。土砂崩れとなり、いつまでも救助に来ないとき、自分の敷地を復旧するときできることはないのか。公助や共助はもちろん大事ですが、自助の力が高まっていたら、自分で守れること、いち早く復旧できることもあるのではないか。あるいは、有事を想定できていれば（できないことの多くを知っていれば）、準備できることや意識も備わると考え、防災、減災のための学びを考えました。

本企画では、災害に備える防災力と、災害時また災害後に速やかに復旧活動に動くことのできる（意識を持てる）人材の育成を目指します。

内容は、信州防災学・災害レジリエント養成講座では、これまでに実際の災害現場に入って復旧ボランティアの活動してきた方を講師に迎え、現場で求められる知識や行動力、マインドを座学として学びました。1 月 1 日発生した能登半島地震の復旧状況や現場で起きていること、必要となれる備えなど、リアルな現場の様子を伝えていただきました。食事や寝るところだけでなく、日常となったときにトイレやお風呂の話など、平時のうちにいかに非常時をぞ想像し、普段から使い慣らしておくことが重要か、話していただきました。

オンラインでの座学、インプットの様子（3/18）

30 日には、自助としていざという時に使える（かもしれない）現場で求められる重機操作を講習として学びました。知識や技術習得はもちろん糧になりますが、現場では、練習ではわからない事態やアクシデントが起きます。それらも体感しておくこと、また人材や技術との繋がりを持っておくことも、備えの一つになることを実感しました。

本講座の目標は、今回は、重機の操作方法を学び、実際に穴を掘り土砂をどかす技術を体験・習得しましたが、いつどこで、どのように起こるかかわらない災害に対し学ぶ

機会を、県内大学が連携した協働授業として開催できないかを試行するため、今回実施してみました。

基本的なアームの操作、掘削方法を学ぶ

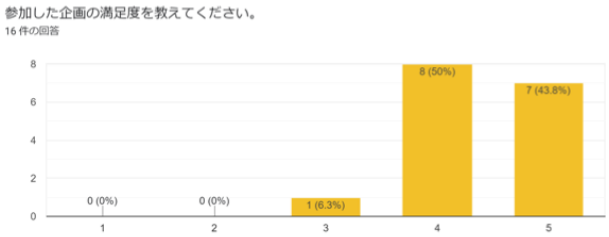
異動・排土板、積載の操作方法を学ぶ

精緻、埋め戻し、丸太等の撤去の方法を万部

性別、学年問わず、また留学生なども巻き込んだ多文化が協働する信州防災学の授業を、県内大学で連繋して実施できないか、検討していきます。

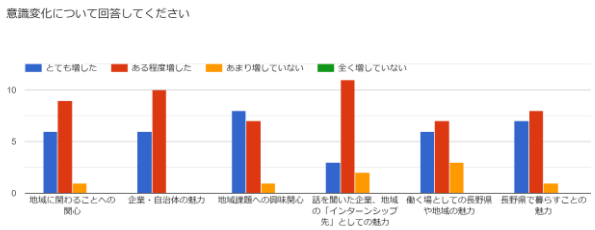
６．信州若者会議の成果と課題

これまで 4 年間の信州若者会議を振り返ってみて、その成果（効果）と課題を検証してみます。2022 年の会議で参加学生に対するアンケートを実施したところ、16 名と少ない回答であるが満足度は非常に高いものでした。



表：参加者満足度（5 段階）

また、意識の変化として、企業・自治体への魅力や地域への関心は高まったと答える学生も８割以上となっていて、企画に参加してさえもらえれば、認知度や魅力向上の効果は高い。



［地域に関わることへの関心］　増した、ある程度増した ¨93.7％
［企業・自治体の魅力］　増した、ある程度増した ¨100％
［地域課題への興味関心］　増した、ある程度増した ¨93.7％
［インターンシップ先」としての魅力］　増した、ある程度増した ¨87.5％
［働く場としての長野県や地域の魅力］　増した、ある程度増した ¨81.2％
［長野県で暮らすことの魅力］　増した、ある程度増した ¨93.7％

表：地域の魅力度（企業・働くこと等）の変化

しかし現在、学生の参加者数が伸びない、また地域活動に関わる学生、いわば地域志向が減少傾向にあると感じています。これは、コロナ禍での体験や地域が置かれている状況、学生の関心などさまざまな要因があると思われます。もちろん、本企画（私自身）の告知や企画の決定が遅いという根本的な原因がありますが、それを差し置いても学生が地域のイベントに参加するまでの意識・物理的（移動手段や活動費）・ソフト的（情報やコミュニケーション不足）などの複合的なハードル（課題）を感じているように思います。もう一度、地域や活動、意識やモチベーション（楽しい、やりがいがある）を繋ぎ直すような機会や時間の必要性を感じています。

しかしながら、2021 年に学生からもらったコメントには、満足した理由として、下記のようなことが挙げられていました。

・事業者さんからのリアルな視点で地域課題を聞くことが出来た。

・多くの学生が目的意識をもって行動していた。

・活躍している方々が、どのようなバックグラウンドを持ってここにいるのか知ることが出来、刺激になった。

・企業の方のお話をたくさん伺い、多様な視点を学べた、などと話していました。

・企業さんがおっしゃった、やりたいと思ったことをやるという言葉と、自ら動いていることに刺激を受けた。

・大人の人が本気で地域の課題解決のために動いている様子を間近で見せてもらって迫力を感じたとともに、地域の課題の複雑さも感じることができた。

・色々な大学生が地域に集まり、共同生活をしながら、

各々の興味がある分野について自分で行動する事がとても自主性が高く面白かった。

上記のように、魅力的な地域企業が見えること、またリアルな体験が何より印象や認知度を向上する効果があることが、定性のコメントからもうかがえます。この地域におけるリアルな体験を届ける機会と仕組みづくりを「県内大学連携事業」を活用し、引き続き試行錯誤して実践していきたいと考えています。

7.まとめ

私は、信州若者会議を立ち上げた最初の企画書に「汎濫停蓄（はんらんていちく）の場づくり」という言葉を書きました。汎濫停蓄とは、「汎濫」は水が漲り溢れることで、転じて、深く広い学識を持っていいて広く物事に通じること。「停蓄」は水が長く溜まること。転じて、学識が深いことの喩えです。川の水の勢いの如く若者が活発に動き、そこで学んだ知識や経験が集まり、実践知が深まるような場所が、長野県の各地、大学や企業を問わず関わり実現していくことを目指し目標として掲げました。コロナ禍を経て、変革が激しい社会や難題が山積する地域に対し、まだまだ対応できないことも多く先を見通すことも難しいですが、何とかしたいと思う人材こそが、この状況を突破していける大きな資源であると考えています。信州若者会議、また大学間連携事業が、そのきっかけとなるよう、私自身も微力ながら引き続き取り組んでいきたいと思います。

最後に、4 年かの事業構築にご協力をいただいた大学の先生方、企業・自治体や参加してくれた学生の皆さまに感謝を申し上げますとともに、引き続き高等教育コンソーシアム信州の活動に協力いただける、企業・自治体、地域の皆様のご支援、参画を、重ねてお願い申し上げます。

2024.3.30 寄稿：勝亦達夫

信州大学キャリア教育サポートセンター　講師
高等教育コンソーシアム信州　推進チーム　メンバー
勝亦　達夫　/KATSUMATA Tatsuo

プロフィール

静岡県出身。東京理科大学理工学部建築学科卒。平成 17 年より小布施町と東京理科大学が共同で設立したまちづくり研究所員として活動。平成 23 年に博士号（工学）を取得。同年より小布施町役場勤務し、景観・まちづくりなどを担当。平成 28 年度日本建築学会賞・教育賞を受賞。平成 28 年から信州大学キャリア教育・サポートセンターの助教を経て講師となる（現職）。人材育成（キャリア教育）と地域づくりを実践しながら、地域課題を産官学の協働で解決するため活動している。専攻は建築歴史・意匠、まちづくり。